

課題解決への見通しをもつ力を育む中学校保健体育科指導の在り方（第一年次）

－「学びの視点」から運動の分析や対話を行う思考場面のデザインによって－

長期研究員 桃井 陽介

《研究の要旨》

本研究では、中学校保健体育科体育分野において、課題解決への見通しをもつ力を高めることを目指した。そこで、「課題の発見」、「課題解決への予想と対策」、「学習過程の振り返り」という三つの思考場面において、「する・みる・支える・知る」の四つの「学びの視点」から運動の分析や対話を行った。これにより、自己の課題を捉え、課題解決に向けて運動の取り組み方を工夫する生徒が増え、課題解決への見通しをもつ力の高まりが見られた。

I 研究の趣旨

中学校学習指導要領保健体育科の目標では、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して資質・能力の育成を目指すと示されている。また、体育の見方・考え方は、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」であると解説されている。

一方、福島県教育委員会による「令和5年度学校教育指導の重点」には、「自他の運動や健康についての課題を発見し、解決に向けて試行錯誤を重ねながら思考を深め、よりよく解決することができるような学習過程を工夫する」と示されている。

これらを踏まえ、自身の授業を振り返ると、課題として、生徒が自己の課題を発見したり解決に向けて考えたりする学習場面が少なかったことが挙げられる。特に、自己の課題に応じた運動の改善点を見付けたり、運動実践の場面で自己の考えを確かめたりする機会や、仲間と協働して理解を深める機会が少なかった。そのため、生徒は運動への多様な関わり方を通して、思考を深める学習をすることができていなかったのではないかと考える。

以上のことから、本研究では、「動きや取り組み方の課題に気付く力」、「課題に応じて、解決に向けた運動の行い方を工夫する力」、「思考し判断したことを言葉や動作等で他者に伝える力」などを育む場として、「課題の発見」、課題解決への予想と対策（以下、「予想と対策」）、学習過程の振り返り（以下、「振り返り」という三つの思考場面を工夫する。さらに、それぞれの思考場面に、自他の課題を見付け、改善していくための視点として、「する・みる・支える・知る」の四つの「学びの視点」を取り入れる（図1）。これは、体育の見方・考え方にある運動やスポーツとの多様な関わり方に準ずるもので、この四つの視点からデザインされる思考場面により、課題を発見

し、解決に向けた予想の下、対策を講じ、振り返って効果を検証する力を高めていく。本研究では、その力を課題解決への見通しをもつ力と定義する。

「学びの視点」から運動の分析や対話を行う思考場面のデザインにより、運動への多様な関わり方を通して、思考を深める学習を設定することで、課題解決への見通しをもつ力を育成する授業を構築したい。



図1 四つの「学びの視点」

II 研究の概要

1 研究仮説

保健体育科体育分野の授業において、以下の手立てを講じれば、運動の分析や対話を行う三つの思考場面によって、課題解決への見通しをもつ力を育むことができるだろう（図2）。

【手立て1】「学びの視点」から課題を発見する場の工夫

【手立て2】課題解決に向けた「学びの視点」に基づく対話活動の工夫

【手立て3】「学びの視点」から振り返る活動の工夫

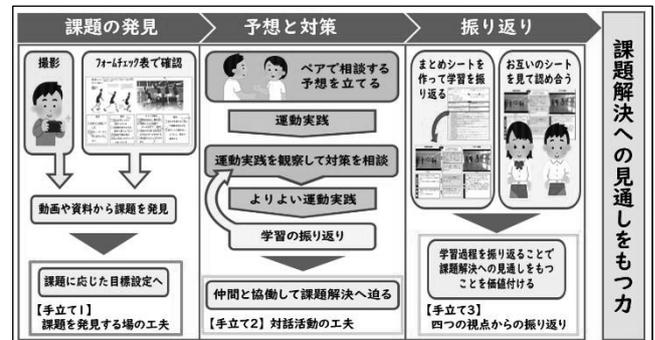


図2 三つの思考場面と手立ての位置付け

2 研究の内容

(1) 【手立て1】「学びの視点」から課題を発見する場の工夫

挑戦する目標を設定するときに、まずは、運動を行い（する）、その様子を動画に撮る（支える）。次に、自己の動画を模範映像や資料と比較し、課題となる運動の改善点を見付ける（みる・知る）。さらに、気付いたことや考えたことをワークシートに整理し、発見した課題に基づいて、具体的な目標を設定する。このように「学びの視点」から運動の分析や対話を行うことで、課題を発見し、それぞれの課題に応じた目標を設定する。

(2) 【手立て2】課題解決に向けた「学びの視点」に基づく対話活動の工夫

運動実践の場面で、課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の対策を見直す対話活動を設定する。まずは、仲間と共に有効な練習方法を予想し（支える・知る）、実際に体を動かして確かめる（する）。次に、互いに運動を観察し合い（みる）、技術的な課題や、さらに有効だと思う練習方法を考え、対策を立てる（支える・知る）。このように「学びの視点」から運動の分析と対話を繰り返すことによって、仲間と協働して課題解決に迫っていく。なお、対策を見直す際の根拠となる、練習中に気付いたことや仲間からのアドバイス（支える・知る）は、随時ワークシートにまとめるようにする。

(3) 【手立て3】「学びの視点」から振り返る活動の工夫

【手立て2】においても、「学びの視点」から運動を振り返る場面を設定するが、【手立て3】では、単元全体の成果を振り返る活動の充実を目指す。撮影した動画や、これまでの学びを蓄積してきたワークシートを活用し、課題の達成度やその理由などについて考え、「まとめシート」として表す（知る）。「まとめシート」は、プレゼンテーションソフトを使用し、単元の学習過程を1枚のシートにまとめたものである。これを見合うことで仲間のよさに気付き、考えたことを伝えられるようにする（支える）。このように「学びの視点」から学習過程を振り返る運動の分析や対話によって、課題解決への見通しをもって活動したことを価値付ける。

3 研究の実際

対象生徒 第2学年62名（2学級）
 授業実践Ⅰ「球技 ソフトボール」（10時間）
 授業実践Ⅱ「球技 バレーボール」（10時間）

本稿は、授業実践Ⅱ（単元目標：スパイクを習得し、試合で打てるようになる）について述べる。本単元では、第4時から第8時に三つの思考場面を設定した。

(1) 【手立て1】について

第4時の思考場面「課題の発見」では、ワークシートを使って考えを整理した。まず、タブレットで仲間と互いの試技を撮影し、撮影した動画と模範映像を比べて改

善点を記入した。次に、基本的な技能のポイントと動きを示した資料を基にフォームをチェックし、自分の動きを分析した。そして、仲間と共に、できている部分と改善したい部分を明確にし、ワークシートに記述した。

生徒Aは、動画との比較やフォームチェックの結果から改善点を分析し、よりよいスパイクを打つために、「タイミングを合わせる」と、「ボールを捉えて手に当てる位置を変えること」が必要だと考えた。さらに、難易度で分けた達成段階から自分が目指す段階を選び、「(ジャンプの) タイミングを合わせ、しっかりとした位置で打つ」と、課題に応じた目標を設定した（図3）。その際に、「しっかりとした位置」という目標設定の曖昧さに気付き、より具体的な目標になるよう追記していた。

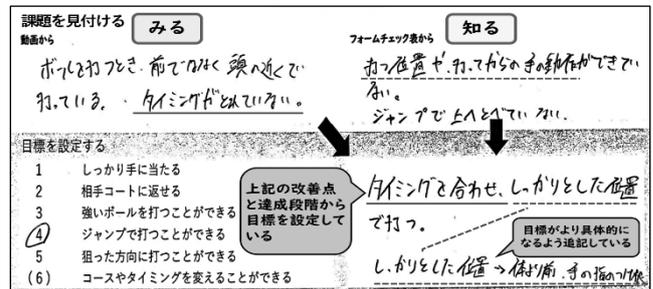


図3 生徒Aの「課題の発見」

(2) 【手立て2】について

第5時から第7時の対話活動では、【手立て1】で設定した目標に近い生徒同士でペア活動を設定した。これによって、「予想と対策」での思考が具体的にになり、有意義な対話活動とすることができた。また、ワークシートを用いて、「学びの視点」からどんなことを確かめるか、どこに注目して観察するか、どんなアドバイスやサポートが必要か、どんなことを知る必要があるかを話し合った。その対話を通して、Webサイトで参考になりそうな動画を閲覧して知識を共有するペアの様子も見られた。

生徒Bは、高い打点でボールを打つためにどのような練習をするかペアと相談した。その結果、「横から見てもらって、体の使い方を見てアドバイスしてほしい」ことを相手に伝え、他のペアの取組から、「動画を見て正しい動きを学ぶ。上手い人を観察する」と対策を記述し、練習方法を工夫して取り組むことができた（図4）。

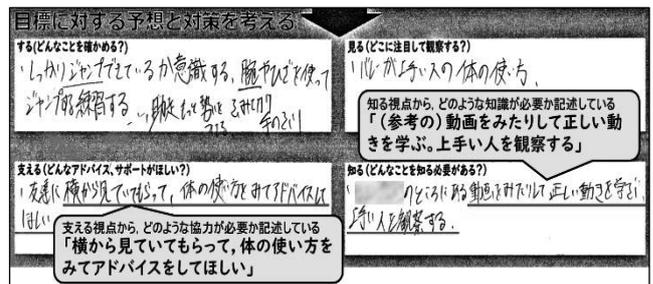


図4 生徒Bの「予想と対策」

話し合い後の運動実践では、ペアで助走の取り方や踏み切りのタイミングなど、課題に合わせてボールの種類や練習条件を変えていた。また、支えるという視点では、話し合った内容を確認しながら、互いの動きを観察し、課題解決に向けて具体的にアドバイスする姿が見られた。

毎時間の振り返りでも「学びの視点」を活用し、ワークシートへ対策の具体的な内容を記入した。生徒Cは、前時の振り返りで、スパイクの跳躍の際に「両足で踏み切れていない。意識を向けるようにする」と記述していた。次時で確かめた際に「両足で踏み切ることができた→目標1クリア」と記述していたことから、思考場面を活用して、技術的な課題に段階的に取り組んでいたことが分かる。その後の授業では「ペアの視点から見て、手の先にボールが当たってしまっている」という、仲間のアドバイスを基に自分の動きを振り返った。仲間と協働して課題解決へ迫る姿が確認できた(図5)。

10/11	する 支える	見る 知る	両足で踏み切ったり両腕を後ろに引いていなかった ので、まずは踏み切りに意識を向けるようにする。
10/12	する 支える	見る 知る	助走の際にリズムを意識してきいていたため、スピードもつけるようにする。 両足で踏み切ることができた→目標1クリア 振り返ったことを次時で確かめ、段階的に取り組んでいる
10/17	する 支える	見る 知る	スパイクをする際に自分が思っているより早くボールに手をあてるようにする。 試合中のサーブと選手の間におどすようにする。
10/19	する 支える	見る 知る	ペアの視点から見、ボールを打つ際に手の先にボールが当たってしまっているため、今度は少し遅く打つようにしようと思いついた。 他者から得た新たな気付きから考えている

図5 生徒Cの「振り返り」

(3)【手立て3】について

第8時では単元の学習の総合的な「振り返り」場面で、「まとめシート」を作成する時間とした。

まず、【手立て1】や【手立て2】で記述したワークシートを基に学習内容をまとめ、次に、課題発見時の動画と現在の動画を比較し、自己の動きの変化や成長に気付かせた。さらに、互いの「まとめシート」を見合い、仲間のよさを見付けたり、参考にしたことを伝えたりした。このような「学びの視点」からの「振り返り」によって、課題解決への見通しをもって活動したことを価値付け、今後の学びにつないだ(図6)。

	最初の動画	ベスト動画
分析内容	<p>見る</p> <p>私は自分の撮影した動画をみてタイミングが合っていないと自覚しました。</p> <p>知る</p> <p>参考用の動画を見て参考にしたり、上手な子の話をきいたり、アドバイスをもらったりしました。</p>	<p>見る</p> <p>完全にうまくいったわけではないけれど、最初に比べるとしっかりと飛べたり、相手コートに上手に返るようになって、うれしかったです。</p> <p>また、バレーは得意ではなく、どちらかというと苦手なほうなのですが、試合でスパイクを打てたり、仲間と協力して出来ることにバレーが好きになりました。</p>
目標	<p>タイミングが合っていない手もしっかり当てることが出来るようにしっかりと飛ぶことが出来るようにする</p> <p>相手コートにしっかりと返すようにする</p> <p>・タイミングを合わせる</p>	<p>自分の学習過程を振り返り価値付けている記述</p>

図6 単元全体を振り返る「まとめシート」

III 研究のまとめ

1 検証と分析

(1) 三つの思考場面におけるワークシート記述の分析

課題解決への見通しをもつ力の変容を確認するために、実践IとIIの思考場面の記述内容を、手立てに準じた三つの要点で比較した。また、それぞれの内容が、具体的に根拠に基づくものであるかを確認し、成否を判定した。

一つめは「課題を明確に捉えることができたか」である。単に動きの違いを見比べた課題発見ではなく、運動の分析に即した目標として捉えていたかを確認した。二つめは「具体的な対策を考えることができたか」である。目標に正対した具体的な対策となっていたかを確認した。三つめは「根拠を示して振り返ることができたか」である。何に気を付けて活動したか、何を参考にしたかなど、具体的に振り返っていたかを確認した。

それぞれの基準に対して、十分に記述していたと判断される生徒数が、実践Iから実践IIで増加していたことが確認できた。また、カイ二乗検定^{*1}を行ったところ、一つめと二つめの要点が有意に増加した(図7)。

※1 ある質問への回答人数や%の相違を検査する方法

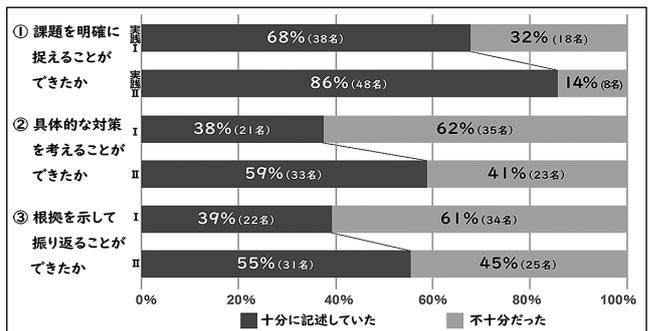


図7 ワークシート記述内容の分析 (n=56)

このことから、見通しをもって課題解決へ取り組む生徒が増加し、特に、課題を明確に捉える力や具体的な対策を考える力に向上が見られることが分かった。

その要因として、【手立て1】で複数の「学びの視点」を組み合わせて課題を発見し、目標を見いだす工夫を加えたことが効果的だったと考えられる。また、【手立て2】の「学びの視点」に基づいて他者との対話から得た情報を取り入れ、学習過程を具体的にイメージさせたことが、思考の深まりにつながったと考えられる。

一方で、【手立て3】については有意な変化が見られなかった。その要因を探るため、「根拠を示して振り返ることができたか」が不十分だった生徒25名の記述を分析した。すると、毎時間の振り返りの記述が、感想記述や簡単な活動記録にとどまっている生徒が多く、結果から考察したり、次時へ反省を生かそうとしたりする記述が少ないことが分かった。このことから、単元全体の「振り返り」

返り」を思考活動として有意義に働かせるには、根拠や実践に基づいた記述ができるよう支援し、毎時間の振り返りを充実させる必要があったと考える。

(2) 生徒の変容について

課題解決への見通しをもつ力が、生徒の学習の様子にどのように影響したかを検証した。前述のワークシート記述の分析で、実践Ⅰではあまり記述できなかつたが、実践Ⅱでは十分に記述できた生徒を「課題解決への見通しをもつ力に大きな変容があった生徒」と捉え、該当する11名の記述を詳しく分析した。すると、実践Ⅰでは感想程度だったが、実践Ⅱでは運動実践に基づいて自分の考えをまとめたり、前後の学習とつなげて考察をしたりしていたことが分かった。図8は、生徒Dが思考場面で深めた考えと運動実践を結び付け、自分の変化や成長を捉える「振り返り」が変わった様子である。このように、思考場面で【手立て2】が有効に働き、多様な視点からより精密な自己評価を行い、思考場面と運動実践を結び付けながら課題解決に迫っている姿が確認できた。

図8 生徒Dの「振り返り」記述の変容

生徒Dのように、「振り返り」の変容が技能習得に効果的に働いた生徒が数多く見られた。その効果を確認するため、実践Ⅱの授業映像を分析し、学習集団全体の技能向上を検証した。単元の目標「スパイクを習得し、試合で打てるようになる」に合わせ、1授業当たり(6～10試合)のスパイク率^{※2}を調べた(図9)。

※2 本研究では、スパイク率を(スパイク回数/攻撃回数)と定めた。攻撃回数は、サーブを除く相手コートに向かう打球とした。

時数	対象(試合数)	攻撃回数	スパイク回数	スパイク率	スパイク率
第6時 男女混合班	A組(6)	54	14	10	25.9%
	B組(6)	42	18	15	42.9%
	全体(12)	96	32	25	33.3%
第10時 男女混合班	A組(6)	54	40	35	74.1%
	B組(6)	48	36	27	75.0%
	全体(12)	102	76	62	74.5%
第10時 男女別班	男子(4)	28	18	18	64.3%
	女子(4)	28	23	15	82.1%
	全体(8)	56	41	33	73.2%

図9 ミニゲームでのスパイク率

授業での効果を測るため、特にバレーボール部以外の生徒の数値に注目し、第6時と第10時のスパイク率を比べると、26.0%から60.8%へ増加していた。学級別や男

女別の分析でも同程度の増加があったため、一部の生徒だけでなく、多くの生徒の技能の向上が確認できた。

このことから、課題解決への見通しをもつ力を育成する思考場面のデザインが、生徒の思考を深め、思考と実践を結び付ける学習活動につながったと分かる。そしてそのことが、学級全体の技術習得に役立ち、技能を發揮しようとする実践意欲も高める効果があったと考察する。

(3) 生徒の意識調査の分析

課題解決への見通しをもつ力の高まりを、実践前後のアンケートにより、運動へ取り組む意識の変容で測った。5件法で、「4」以上の肯定的な回答をした生徒の割合に大きな変化があった項目は、「少し難しい運動でも努力すればできると思う」で60.7%から83.9%への増加だった。次に、「保健体育の学習はふだんの生活や社会に出てから役に立つ」が、69.6%から80.3%に増加した。さらに、「運動技能向上への取り組み方」について記述式で質問し、結果をテキストマイニングで分析した。実践前に比べ、実践後は「学びの視点」につながる「改善」、「考える」、「見つける」、「課題」などの言葉が増加した(図10)。

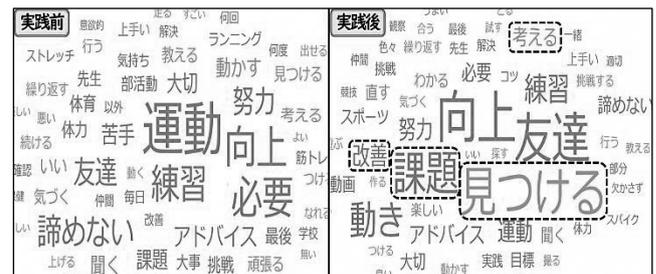


図10 「運動技能向上への取り組み方」アンケート(n=56)

また、具体的な見通しをもっている記述や、運動への多様な関わり方に気づき、実践化を図ろうとする記述は30.3%から55.4%に増加した。生徒は、「学びの視点」から運動の分析や対話によって課題解決を目指す活動が有効だと感じ、他の場面でも実践しようとしたと考える。

2 成果と課題

(1) 研究の成果

運動の分析や対話を行う思考場面のデザインによって、課題を明確に捉える力や、具体的な対策を考える力を高めることができた。さらに、生徒が運動について深く考え、思考と実践を結び付けることで、仲間と共に課題解決へ迫る姿が見られ、技能と意識にも変容が確認された。

(2) 今後の課題

運動の多様な関わり方を通して考えたことを根拠に、学習を振り返る「振り返り」の思考場面を充実させることが課題である。そのためには、思考と実践を結び付ける、より具体的な運動の分析と、自己や仲間の対策を見直す、さらなる対話活動の工夫が必要である。